様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３２０９

研究課題名（和文）『百科全書』本文批判における基礎的校訂方法論の確立とその学術的応用

研究課題名（英文）Establishment and Academic Application of Basic Revision Methodology in Criticism of the Text of the Encyclopedia

研究代表者
逸見　竜生（Hemmi, Tatsuo）

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：６０２５１７８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ディドロ＝ダランベール『百科全書』(1751-1767) 本文の基礎的校訂方法論の確立をおこなった。特にこの研究では、同時代フランスおよびイギリスを中心とした叢書・類書を取り上げて、源泉批判論に基づく本文形成論を考察した。いかなる具体的な資料群が『百科全書』に用いられ、どのように引照・書承されたのか。これまで十分に解明されてこなかったその実態、また作権史、書承史および編集史など、本文を囲繞する18 世紀に固有の歴史的諸問題と本文批判の問題を接続させることによって、伝統的な文献批判論を凌駕する歴史的な地平のうちに『百科全書』本文批判論を再定位した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『百科全書』本文がこれまで研究者が想定したよりもはるかに広汎な先行文献群から自由に移記されている点へ着目し、その現象の解明を図る点が上げられる。「混態」とここで呼ぶ、しばしば見分けがたい複数の文献群の縫合からなる本文形成についての本格的な研究は、本研究が初めてである。これまで『百科全書』本文研究に累積してきた課題の解決に向けて、明確な方向性と指針を与える結果をもたらすことが予想される。実現が待たれる『百科全書』本文批判校訂版の編纂に向け大きな意義を持つことになろうとともに、国際学術機関と連携しての他の学芸著作本文批判にも応用が可能となろう。

研究成果の概要（英文）：This study establishes a basic revising methodology for the text of Diderot-Dalembert's Encyclopedia. In this study, we have taken up a series of books, mainly in France and England, that were contemporaneous with the study of the source. We discussed the text formation theory based on critical theory to determine specific materials used in the Encyclopedia. This study is a critical study of the text, including its actual state, the history of authorship, the history of epistolary transmission, and the history of editing, not sufficiently elucidated until now. By connecting the issues of textual criticism with the historical issues inherent in the enclosing eighteenth century, we have established the theory of textual criticism of the Encyclopedia was re-localized within a historical horizon that surpassed the theory of literary criticism.

研究分野：フランス語・フランス文学

キーワード：啓蒙思想　『百科全書』　ディドロ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

源泉批判論に基づく本文形成の解明は、『百科全書』本文批判における最大の課題のひとつとして多くの研究者が注目している分野であるが、なお多くの課題が残っていた。申請者はそれまで特にディドロ執筆項目の本文形成論に焦点をあて、成果を挙げていた。ディドロが直接の典拠とし、多くの場合引用明示をせずに暗黙に本文に移記した資料群を、同時代のテクストにあたって可能なかぎり選別し同定し、本文への組込に際しディドロが組織的に用いた特異な編集・編纂の様態を研究史上初めて実証していた。

『百科全書』項目本文が、多様な書承材源を源泉とする素材の合成ないし混成の性格を含み持つことは早くから予想されていた。しかし複雑な素材の組合せからなる本文形成の実態を体系的に例証したのは申請者の研究のほか見られていなかった。

２．研究の目的

本研究は以上の成果を踏まえてそこで開発した手法をさらに発展させ、本文形成のより体系的な確証にもとづく『百科全書』本文批判構築に向けての土台を築くことにあった。

一般に、本文伝承論における複数の本文系統の相互干渉の様態を「混態」(contamination) という。この概念を拡張して本研究で用い、これら多層的な文献群の縫合作業からなる本文の様態を「混態」的本文形成とみなして概括することができる。このような混態はどう解釈されるべきか。方法論的に一貫した視野からそれを明らかにできれば、『百科全書』本文批判論における重要な前進となる。2) 源泉批判と混態としての本文様態の解明は、単に文献批判の平面のみにとどまらない。ある項目の署名者がディドロであることは疑いえない場合でも、混態的本文の背後にはディドロが拠り所とした先行文献の層がある。それらの作者もまた『百科全書』を支えていると考えるならば、混態的本文は〈複作者〉multiple author 的な歴史的様態をもつと見なしうる。これら複数の作者性(authorship) の実態はいかなるものなのか。本文への辞典や叢書などのいわゆる書承世界における編修者(compilateurs)の作権(auctoritas) は、文芸の著者(authour) とどのように違っているのか。編修者による本文改修の権限はいかなるものとみなされていたか。こうした点を具体的な資料に基づきあきらかにしていくことが目的であった。

３．研究の方法

本研究は、研究期間の 4 年間に『百科全書』本文批判に関わる以下の 4 群の研究をおこなった。すなわち、

I.『百科全書』本文様態研究

本研究計画の基盤的研究となるディドロ執筆項目本文の文献批判論の部分である。源泉となる先行文献がいかに選択され、いかに『百科全書』項目本文へ移記されているのか。移記行為における編修者ディドロによる創意はどこにあるのか、混態本文を作成しながら何が意図されていたのか。混態の実態を明確に示す改修や補間、転位の様態等、校合を通じて精しく解明されねばならない。この Ｉ 群によって特に解決されるべき課題としては、以下が挙げられるだろう。1) 移記の対象となる先行文書群の識別、2) 移記の規模の及ぶ範囲、3) 移記における補間や改修、要約など、本文編集論上の移記行為の機能類型の解明、4) 前項でえられた移記類型と、項目執筆者や項目分野・項目分類の違いなどとの相関性の分析、5) 個別的編集意図の再建である。

II.『百科全書』における作権史的考察

本文の原著性に関わる作権史の問題を調査した。書き手が自らの書記した本文に対する原著者性(authorship) を社会慣習的に他者に承認させる権利に関し、これを中世期以来の文芸の伝統に則して作権(auctoritas) と呼ぶ。この作権は時代やジャンルにおいて特殊に流動する(Machan[1994])。『百科全書』と同時代著述に見られる混態的本文形成、より書き手に近づけて言えばその複作者(multiple auteur) 性は、ひとり『百科全書』に孤立的な現象ではなく、少なくとも 18 世紀中葉頃までの初期近代文化のうちにより一般的に見られた、伝統的・文化慣習的な中世以来の作権意識の古層のひとつの現存としてみられる。

III.『百科全書』の書承史的考察

源泉批判のため、ラテン語文献やその近代語（英・仏語）による翻訳、近代語文献とその翻訳、それらの再編纂である学術的辞書（類書・叢書も含む）や多くの抜粋や書評を通じた学術的定期刊行物(priodiques) など、同時代の学術的文書群を通覧していくと、混態的本文の傾向は『百科全書』のみに見られる特殊な現象ではなく、源泉材源自体がさらに別な先行する諸資料群の合成・混成であることに頻繁に気づかされる。こうした広汎に認められる現象を説明するのに、それを法制的に近代的著作権(droit d'auteur)が確立する以前の混乱と変わる書承史的な概念モデルを構築した。

IV. 『百科全書』の編集史的考察

流通する本文が編修者によってたえず共有され、比較的に自由な改修をほどこされる。編修者たちの手から手を経て本文は流動化する。このようなテクストの文化は、初期近代ヨーロッパ学芸共和国の広い学識文化実践（人文学や歴史批判、聖書文献学など）と切り離して考えられない。『百科全書』は本文受容、書承の伝承的慣習に対しいかなる部分を継承し、いかなる部分において異なるのか。混態の意義の解明には、初期近代の書承文化における学芸的テクスト生産と流通、受容史、ならびにそれと相関するディドロら『百科全書』執筆者のレトリカルな編集意図の歴史との相関的理解が必要であった。これらを総合的に問うことで、これらの問題を歴史的次元に置いて考察しえた。

このように 4 つのパースペクティブから、本研究が注目する『百科全書』の混態的本文様態の具体的把握を図る基礎的本文批判から研究計画を開始し、18 世紀中葉から後期における作者性の歴史的位階とその変容、書承史におけるテクスト生産と受容実践の解明、および経年的な編集意図の再建へと徐々に議論を拡大した。これによって、『百科全書』本文形成を可能にした歴史的文脈を階層的に把握していった。

。

４．研究成果

本研究は、『百科全書』研究体制の全体像研究計画を遂行するための国際研究体制の構築を企図し、それぞれの課題細目につき、以下の海外共同研究者に研究協力を行って研究成果を発表してきた。第Ｉ 群：Catherine Volpilhac- Auger（リヨン高等師範学校、モンテスキュー研究）、Ourida Mostefai（ブラウン大学、ルソー研究）、Olivier Ferret（リヨン第２大学、ヴォルテール研究）、第 II 群：Maria Susana Seguin(モンペリエ第３大学)、Franois Ppin(リヨン高等師範学校古典思想史研究所)。第 III 群：イ・ヨンモック（ソウル大学教授）ら韓国を中心とするフランス 18 世紀研究、特に韓国 18 世紀学会との協力である。本研究開始以来、本研究に関わり学会等で主催した国際シンポジウム・ワークショップで件数は 10 点以上にのぼる。その間、リヨン高等師範学校客員教授として国際研究を深めるとともに、ソウル大学での共同研究も組織的に進めた。国際 18 世紀学会エジンバラ大会では、本研究に関わる国際シンポジウムを開催し、研究成果の公表に務めた。折悪しくコロナウィルス感染拡大により研究成果の刊行は研究期間後となったが、早期の実現を目指しているところである

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 逸見龍生	４．巻 23
２．論文標題 Diderot en deplacement	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Cahier	６．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 逸見龍生	４．巻 23
２．論文標題 初期近代におけるテクストのデジタルアーカイブ構築に向けて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Cahier	６．最初と最後の頁 23-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 逸見龍生
２．発表標題 初期近代におけるテクストのデジタルアーカイブ構築に向けて
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 逸見龍生
２．発表標題 Diderot en deplacement
３．学会等名 初期近代におけるテクストのデジタルアーカイブ構築に向けて
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 逸見龍生ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 406
３．書名 百科全書の時空	

１．著者名 Tatsuo HEMMI	４．発行年 2016年
２．出版社 NUUS	５．総ページ数 235
３．書名 Lecture critiques de Diderot et de l'Encyclopedie	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『百科全書』・啓蒙研究会
http://www2.human.niigata-u.ac.jp/~seel/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考